

研究ノート | Research Note

コロナ禍におけるオンライン授業の実践とその意識調査
—必修英語の授業を通して—

The Practice of Online Class under COVID-19 Situation and Its Awareness Survey
-Through the Questionnaires in English Class-

小原 弥生

OBARA, Yayoi

尚美学園大学

総合政策学部非常勤講師

Shobi University

2022年3月

March 2022

コロナ禍におけるオンライン授業の実践と その意識調査 — 必修英語の授業を通して —

小原 弥生

The Practice of Online Class under COVID-19 Situation and Its Awareness Survey

-Through the Questionnaires in English Class-

OBARA, Yayoi

[要旨]

新型コロナウイルス感染症（COVID-19 〈以下コロナ〉）の影響により、筆者の勤務している大学でもオンライン授業が行われた。2020年度から2021年度も引き続きオンライン授業を行っている。本稿では、オンライン授業の実践について述べる。授業は課題提示学習型である。そこでは、大学のPortalとGoogle classroomを使って配信し、提出物、小テスト、語彙テスト、アンケートを行った。アンケートは授業を受ける前と半年後に行った。授業の感想を聞き、次にオンライン授業についてのアンケートも行った。その結果、オンライン授業には概ね満足であった。学生はオンライン授業ではリアルタイムの双方向授業よりオンデマンド形式に好みを表すことが分かった。又、オンライン授業の良さとしては自分のペースで進められるや集中できるといった良い面を指摘する学生が多かった。一方、特に1年生からは、対面を望む声も多く聞かれた。又、悪い点としては教員ごとに活用するシステムの違いが挙げられた。特筆すべきものは1年生で最も多かった「人との交流がない」という問題であった。これはコロナ禍で起きた大きな課題と言える。一方コロナ禍は、日本の遅れていたオンラインでの教育の後押しをしたということもいえる。

[Abstract]

In this paper I will introduce how I taught basic English classes during the pandemic of Covid-19 in 2020 and 2021. I taught them through Portal and Google classroom. Then I asked the students to participate in a survey to get their perspective during the online classes. I used questionnaires pertaining to the English class and about the use of online studies.

In conclusion the results revealed that the students could understand what they were being taught through the Google classroom and that they had a positive experience about learning English through the online class.

Then students prefer on demand classes rather than real time classes because they can learn by their own pace independently. However, the freshmen have a strong desire to have face-to-face classes

they don't know their classmate faces. They don't have any communication with their classmates so far. We teachers have to observe and give some aids for them. This is a very important thing. However, this pandemic also gave us chances to learn how to teach online. It is one of the good things.

キーワード

コロナ禍、オンライン授業、意識調査、必修英語

Keywords:

coronavirus crisis, online lesson, attitude survey, questionnaire

1. はじめに

2020年度、2021年度は新型コロナ（COVID-19 <以下コロナ>）の影響により、多くの教育機関においてオンライン授業が行われた。文部科学省（2021b）によると2021年度に「半分以上を対面授業とする予定とした大学等は、1064校中1036校（約97.4%）、多くは学部・学年ごとに差異」とある。しかし、筆者は非常勤で3つの大学に関わっているが、どの大学も未だにオンライン授業が続いている。必修英語の教科を2020年度前期はリアルタイムでその後は問題提示学習によるオンデマンドで行った。阿部他（2021）は「授業担当経験年数30年以上の群の< ICT活用知識>< 学習プロセス知識>< オンラインAL力>が低かった」としている。筆者は経験年数30年以上に入るので、ICT活用知識は低い部類に入る可能性がある。本稿はそのオンライン授業でどのように英語の授業を行ったか。それに対して学生はどのような反応をしたかを、アンケートを通して探る。

2. 先行研究と本研究の関係

2020年度、2021年度は多くの大学でのオンライン授業の研究の報告がされた。その中で、辛島（2021）は、オンライン授業に対する理系学生と文系学生を比較した意識調査を行っている。どちらの学生もオンライン授業の方が総学習時間が増加したと答えている。本論文では、オンライン授業の実践をし、1年と2年の比較、音楽関係と情報関係の学生の比較も含めて、意識調査を行う。意識調査の設問は辛島（2021）、平林（2021）を参考にし、独自のものを加えた。八城（2021）はオンライン授業コンテンツ作成にかかわる考察をしているがGoogle classroomを用いている。Olexa（2020）はオンライン授業で授業のシラバスおよびプリントを配布するためにGoogle classroomを使用して効果的であると述べている。今回の授業も主にGoogle classroomを使用する。

3. 授業実践

3.1. 実践大学及び授業の位置づけ

実践大学は埼玉県私立大学である。本授業は教養科目の異文化理解力を習得するための必修科目の学ぶ英語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳである。半期ごとに1年春期が英語Ⅰ、秋期英語Ⅱ、2年生は、春期が英語Ⅲ、秋期英語Ⅳである。学期毎に分かれていて、半期ごとに成績はつくが、一般に1年生はⅠ、Ⅱを通年でとり、2年生はⅢ、Ⅳを通年でとる。従って、中には秋期に途中から入る学生もいたり、秋期に抜けたりする学生も数人いるが、1年を通してほぼ同じ学生である。

3.2. 参加者及び時期

オンライン授業の実践は2020年度と2021年度である。本研究は主に2021年度を中心に扱う。クラスは3クラスであり、便宜的に1年、2年A、2年Bとする。1年クラス（以下1年）は芸術情報学部音楽応用学科1年の英語Ⅰ、Ⅱ①であり、成績は1番上のクラスである。2年Aクラス（以下2年A）が芸術情報学部情報表現学科2年英語Ⅲ、Ⅳ⑤であり、情報表現学科の成績は上から5番目のクラスである。2年Bクラス（以下2年B）は同学部音楽表現学科2年英語Ⅲ、Ⅳ③で、音楽の3番目のクラスである。3番目は実質一番下のクラスである。2020年度前期はZoomで行うことができたが、後期は、対面の授業が始まったため、対面と時間的に重なるクラスもあるという理由で課題提示学習となった。課題提示学習は学習者の様子がわからず、Zoomと違い質問に瞬時に答えることができない。学生は年度の途中で変わったので、かなり変化があったのではないかと思う。2021年度も語学のクラスは引き続きオンライン授業であった。やはり、他の授業と重なるということで基本的にリアルタイムでの授業は行えず、課題提出学習やオンデマンドの授業となった。

3.3. 学生の実態

4月当初に学生の実態を把握するためにアンケート調査をGoogle Formsで行った¹。そこで、英検やTOEICの受験経験と結果、海外渡航経験、オンラインに対する希望調査を行った。個人情報を守られること、名前が特定されたり、不利益が生じたりすることはない、参加は自由であり、不参加であっても不利益を受けないことなどを確認した。

(1) 1年クラス（応用①）

春期、秋期とも22名（同メンバー）であり、英検取得者3級2名、準2級9名、2級4名、TOEIC505点その他、7名は未受験である。海外渡航歴は全て旅行で渡航先はオーストラリア、韓国、アメリカ、カナダ、タイ、マレーシア、ハワイ、台湾、香港、中国、などで2日から2週間の短期の旅行で12名が海外旅行の経験がある。オンラインはオンデマンド型を望む学生8名、リアルタイムを望む学生が14名だった。英語には関心も高く、成績もよい。

(2) 2年Aクラス（情報⑤）

クラス人数 春期27名で、秋期は29名である。うち英検取得者3級5名、準2級3名、英検2級1名その他18名は未受験である。

海外渡航経験は留学1名（ニュージーランド1年）、その他は旅行で7名 渡航先はイギリス、アメリカ、グアム、シンガポール、セブ島、ハワイ、フィリピンなど2日から2週間の旅行である。4月当初のオンライン授業の希望はオンデマンド希望23名、リアルタイム希望4名であった。英語は苦手という学生が多いが、苦手だが好きだという学生もいる。オンラインはオンデマンド型を望む学生17名、リアルタイムを望む学生が2名だった。

(3) 2年Bクラス（音楽③）

春期19名、秋期19名である。英検取得者4級1名、3級1名、準2級5名、2級0名

TOEIC505点 その他12名は未受験である。海外渡航歴は全て旅行で渡航先はアメリカ、オーストラリア、シンガポール、タイ、台湾、中国、などで2日から2週間の短期の旅行

¹ 尚美学園大学研究倫理審査委員会より、研究倫理審査を受け、許諾を得ている。（記載番号A-2021-3）

である。11名が海外旅行の経験がある。オンラインはオンデマンド型を望む学生15名、リアルタイムを望む学生が4名だった。英語への関心はあまり高くない。

この授業を受ける前の学生の実態としては、英語の資格試験を受けている学生は2年生にあまりいなく、1年は2年に比べ多く受験をしており、レベルも高いことがわかる。従って、テキストは2年の方がレベル的に高いものを選ぶのが良いかもしれないが、1年生もそれなりに力があるようなので、同じものを選択した。海外渡航経験はどのクラスも同程度であった。オンライン授業に関して2年生は殆どがリアルタイムを希望していないが、1年生は初めてということもあり、リアルタイムを望む学生が多かった。しかし、対面授業との関連があり、この授業はオンデマンド、課題提出学習となっている。

3.4. オンライン授業の概要

3.4.1. 授業の目標

「聴くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」、「考えること」の総合的な英語の力をつけ、英語の基礎を固め総合力をつけることである。技能だけでなく文化的背景や言語観、教養面でも高める。海外ですぐに必要な表現も学び、この授業を通して少しでも英語に興味を持たせるようにする。4技能につながりを持たせることで英語の総合的なコミュニケーション能力をつけることを目標とする。テキストは門山他(2021)で音読を中心とした教材である。Audio streamingがネット上にあり、そこから学生は音源をPC, tablet, smartphoneで聞けるようになっている。Unitは全部で15ユニットあり、各ユニットを2時間で扱う。

3.4.2. 授業内容例

ア 奇数回

(1) Warm-up と Vocabulary Preview

音源を聴く前に New words の英語の単語と右にある意味を選ぶ問題を10題行う。
音源を聴いてリピートする。

(2) Grammar の説明

教科書にある Grammar の説明を教員が分かりやすく、説明する。学生はそれを読んで理解する。

(3) Grammar に関する問題を解く。

(4) 課題の中に教員はあらかじめ会話文に空欄をつけた英文を載せる。左半分には英語、右半分には空欄のある日本語を書いてある。学生は会話の音源を聴いて、会話の中の空欄になっている語を8題、各2語ずつ埋める。

(5) 課題の空欄付きの会話文の次のページに解答を書いてあるので、学生は答え合わせをして、会話文を完成させる。

(6) 会話文が完成出来たら、右の日本語で空欄になっているところを埋める。

(7) 音源を聴いてリピートする。

(8) Role play を行う。それぞれのページには主人公の Takashi のパートとその相手の会話ができるようになっている。学生はQRコードから Takashi の役を選ぶと動画が出てきて、相手の声が聞こえるようになっている。Takashi のパートを練習する。それが終わったら、相手の役を選ぶと Takashi の声が聞こえ、相手の役を話す練習ができる。

(広告が見えるがスキップすればあまり気にならない。)

- (9) 文法問題を行う。
- (10) 音読筆写という writing 練習を行う。
声を出しながら、その声を聴きながら英文を書くのである。1 度目は音読をしながら書く。次にその音読をした文の日本語訳を書く。意味を確認したら、2 回、3 回の音読筆写を行う。
- (11) 前回の答え合わせ
 - ① Reading の答え合わせ
 - ② Listening の答え合わせ
 - ③ 小テストの正解

イ 偶数回

- (1) Reading をする。Reading の課題のところには日本語訳を書いてあるのだが、そこにも空欄を作っておく。
- (2) 学生は Reading の文を読み、抜けているところの日本語を書く。
- (3) Reading の文についての質問に解答する。
- (4) テキストの Listening 問題を行う。
この Listening 問題も Audio streaming にあるので、それを聞いて答える。
- (5) Unit についてのまとめの小テストを行う。
小テストの問題は Google document (or Word) に書いてあり、答えだけを Google forms に書けばよいようになっている。
- (6) 単語テストを行う。
単語テストも Google forms を使って出題する。出題は warm up で行った New words の中から出すようになっている。日本語を英語に直す問題である。Google forms は出題問題をシャッフルしており、学生により順番が違って出題される。
- (7) 前回答え合わせ
文法の答え合わせを解説付きの解答を見ながら行う。

以上がオンラインで出す毎回の授業課題である。

3.4.3. 学生の提出物

- ・ 全て Google classroom から提出することになっている。
- ・ 毎回の授業課題に対する解答を入れたものを提出する。
- ・ 小テスト (Unit の終了時)
- ・ 単語テスト (偶数の Unit の終了時)
- ・ 音読筆写 手書きなので、スキャンしたものを PDF にしてから提出する。(4 課分まとめて)
- ・ 期末課題

3.4.4. その他

- ・ Google classroom では、提出済み、未提出者は「割り当て済み」と表示されるので、その「割り当て済み」となっている学生を選んで提出催促のメールを送ることができる。件名も書

かかれているし、BCCになっているので、学生には自分だけに来ているように見えて便利である。また、提出毎にコメントを書いて返却する。このコメントは学生の励みになる。

- Google classroom では、各回授業課題配布と提出、期末課題提出、音読筆写提出、Vocabulary test、連絡、授業録画の配布、アンケート提出、小テスト提出、資料の配布等で利用している。
- 学生との連絡は Google classroom のトピックに連絡という項目名をつけて、全体向けに、個人向けには「限定公開のコメント」やメールを利用して質問に答えたり、個人連絡を取ったりしている。

4. アンケート調査の結果と考察

4.1. 第 1 回 2021 年度 4 月当初の学生の実態 (表 1)

授業の第 1 回の時に学生の実態をするために行った。

表 1 4 月当初の学生の実態

	1 年	2 年 A	2 年 B	合計
英語の授業はオンデマンドが良い	8	23	15	46
英語の授業はリアルタイムが良い。	14	4	4	22
合計	22	27	19	78

* 数字の後ろは (名)

1 年はリアルタイムが良いというものがオンデマンドを上回っている。2 年生はオンデマンドを好んでいる。1 年は大学は初めてであり、不安もあり、他の学生や教員の様子も知りたいのではないかと考える。従って、リアルタイムで他の学生の顔や声を見たいし、聞きたい。そして、リアルタイムで質問にすぐ応答してくれることを望んでいるのではないかと考える。

4.1.1. オンデマンドを望む理由

* アンダーライン、() は執筆者

(1) 時間的に自由 (9 名)

- 時間を気にしなくて良い、確認したい所をいつでも好きなだけ繰り返し確認できる。
- 自分の時間でできる。
- いつでも見直しが出来るから。
- 授業時間外でも授業を受けることができるから。
- 好きな時に自学自習したいから。
- 授業内容をいつでも確認できるから。個人的に時間に追い込まれることなくゆっくり考えられるからです。
- 繰り返し行える。
- 万が一寝坊したなどのトラブルがあっても後から受けられるから。
- 集中できるときに始められるから。

(2) 自分のペースで (7 名)

- 自分のペースで進められるから。(2)
- 高校の違いなどにより元から学習量に差がある英語を、自分のペースで進められる。

- ・ 自分のペースで学べて講義の振り返ることができるから。
 - ・ 自分のペースで理解が深められる。
 - ・ 自分のペースで勉強できるから。
 - ・ 自分のタイミングで課題を提出できるから。また、教科書さえあればオンデマンドで十分理解できそうだから。
- (3) 感染予防 (3名) (これはオンライン授業全体に言えること)
- ・ 感染予防の観点から対面授業に不安を感じているから。
 - ・ コロナがまだ怖いからオンラインでできるものはオンラインがいいと思う。
 - ・ 人数が多く密になってしまう可能性があるため。
- (4) その他 (5名)
- ・ 教科書やワード (の課題) でやるべきことは理解できるから。(教員や他の学生も必要ではないということか。)
 - ・ 課題の内容そのものに効率よく勉強出来るから。(同上)
 - ・ わざわざ対面で行う必要性を感じないから。(同上)
 - ・ 時間的に厳しいため。(これは (1) にリンクする。)
 - ・ 2限に対面授業があるため。(同上)

圧倒的に多かった理由は (1) 時間的に自由というものであった。従って時間が自由なので、(2) 自分のペースで進められるからという理由が次にあがっていた。(3) の感染予防については、オンデマンドもリアルタイムもどちらも同じであると考える。(4) その他はどこにも入らないものでもあるが、この中の上の3名は対面の授業で教員やクラスメイトの説明、援助、アドバイスに価値をあまり見出していなく、自分で進めていくことができる学生のようなのである。3番目、4番目は時間に自由の (1) に入る可能性がある。

4.2. 第2回アンケート調査 (2021年度秋期初期時点) (表2)

4.2.1. 二者択一質問結果

表2 2021年度秋期初期アンケート結果

質問	学年クラス (%)		
	1年	2年A	2年B
1. 英語の授業はオンデマンドが良い。	85	100	88.7
2. 英語学習はオンラインより対面が良い。	50	16.7	26.7
3. 小テスト、単語テスト、アンケート、音読筆写、期末課題提出など Google classroom に慣れた。	100	79.2	66.7
4. 文法や構文などの解説が分かった。	100	91.7	80
5. 音読筆写は、提出前に3, 4ユニットまとめて書くのではなく、ユニット毎に行った。	95	70.8	45.7
6. 音読筆写は声を出して読みながら行った。	90	87.5	80
7. 音読筆写は英語の発音や文を覚えるのに役立った。	90	87.5	66.7

* 薄い網掛は特に高い数値を表す。濃い網掛は同じ質問の中で最も低い数値を表す。

4.2.2. 二者択一質問考察

(1) 1年生は4月当初は、かなり、リアルタイムを望む学生がいたのだが、半年を終わってそろそろ、課題提出のオンライン学習になれたのか、85%になっている。2年Bのクラスは音楽専攻なので、やはり、直接応答できるのを望む学生がいる。そして2年Aの情報クラスはすっかり慣れてきて、リアルタイムを望む学生はいなくなった。これは慣れてくるとオンライン授業の方が「自分の時間を自由に使える」からという意見があったがその通りであろうと思う。

(2) 対面の授業は学年が低いほど望む学生が多い。しかし、情報は対面をあまり望まない。対面と双方向のリアルタイムは似ているのでその結果が出ているのだと推察される。

(3) Google classroomには1年生の方が、適応が早い。もともと力のある学生が揃っているからかもしれない。情報クラスは秋期に新しく入ってきた学生が4人いて、その他に慣れない学生は4人であった。2年Bクラスは提出物もあまりよくないので、デジタル・ネイティブであっても、スマートフォンには強いが、パソコンには弱いということがいえる。年度当初にはパソコンで打ち込むことが難しいという学生もいた。

(4) 文法の解説は分かりにくいと思っていたが、詳しく説明したために多くの学生がわかっていたようである。特に1年生は良く理解したようである。

(5) 音読筆写は前述した通り、声を出しながら複数回英文を書くのである。1年生は完璧に近いが、2年B音楽の学生は半分以下である。まとめて「提出の為に行っている」ようである。ただ、書き写すのは「提出するため」にやっているのであって、小学生もできることである。そのユニットで学習した会話をその場で声を出して書いて覚えるというのが理想である。そのことについて何回か説明し、その効果も出ている研究も解説したのだが、やはり、直接説明できないことなどがネックの一つになっている。これは今後の課題である。

(6) 声を出して読みながら書くという行為をほぼ全員行っている。これは理想に近づいている。

(7) 「音読筆写が役に立ったかどうか」は、実際には定かではない。これは感覚であるので、実際はどうなのか分からないが、確かに小テストの整序英作文の問題は良くできているようになっている。英文がすらすら出てくるので分かった感じがするのかもしれない。

授業の課題については、数名を除いては、期日まで提出している。語彙テストや小テストに関しては、竹内(2021)は「試験実施について課題を現時点では解決できていないと考えているため、実施していない。」と述べている。別の勤務校で、試験のみ対面で行って対面とオンラインを混ぜたブレンド型の大学で、試験を行った。いつもオンラインでよい成績をとっている学生が対面では全くできないという経験がよくある。又、大部分の学生がオンラインでのテストの方がよくできたという結果もある。しかし、点数が大事なのではなく、ユニットが終わった毎の復習としてみれば、そのユニットの小テストや語彙テストは行った方がよいと考える。また、Google formsはすぐに解答を見ることができ、自分の出来ばえや足りなかったことが自分でわかる。「すぐに解答がわかるのでありがたいです。」という学生もいる。従ってオンラインでも行くと復習やテスト勉強をするという習慣ができると考える。定期テストのような大きなテストは対面でするのが理想的だと感じる。整序英作文の小テストができるようになったのは、音読筆写が役に立ったことの目安にはなる。

4.3. オンライン授業についてのアンケート調査

協力者は、1年21名、2年A25名、2年B15名である。5段階のリカーツ尺度を用いた。

(1) 使っているデバイス

図1 1年

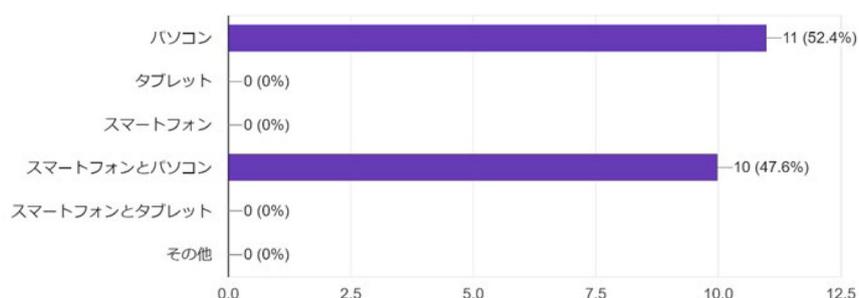


図2 2年A

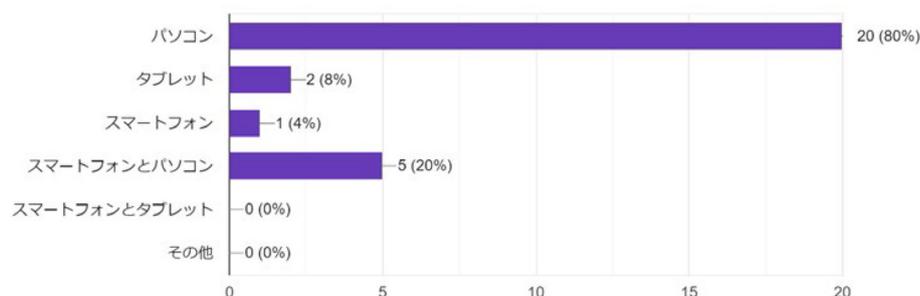
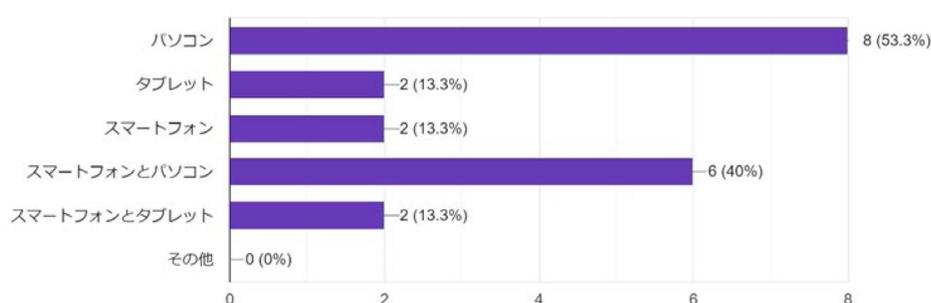


図3 2年B



1年(図1)は「パソコン」と「パソコンとスマートフォン(以下スマホ)の両方」を使っており、2年A(図2)はパソコンが多い。これは情報学科の特性かと思われる。2年B(図3)の音楽は、「パソコン」と「パソコンとスマホの両方」が主流であるが、多岐にわたる。スマホの問題を見ながら、パソコンで答えを記入するという姿は思い浮かぶが、スマホだけで問題を見て答えを書きこむのは難しい。スマホだけというのが2年生で3名いるのが気になるところである。しかし、内山(2021)の行った調査によるとスマホが2020年4月で68.2%、2021年2月で78.8%となっている。この場合は利用した機器を全て書くということになっているが、本学の学生のスマホ利用率は、それに比べると少ない比率だと言える。「パソコン」と「パソコンとスマホ」の使用率を合わせると、90%を超えている。どのクラスもパソコンの保有率、利用率は高いと言える。

(2) 授業を受けている場所（複数選択可）

図4 1年

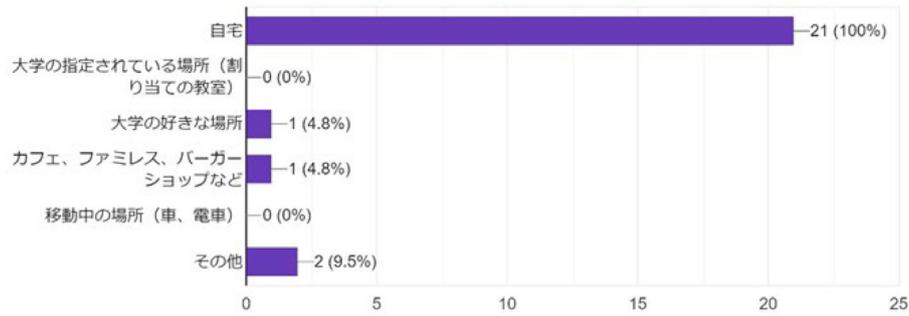


図5 2年A

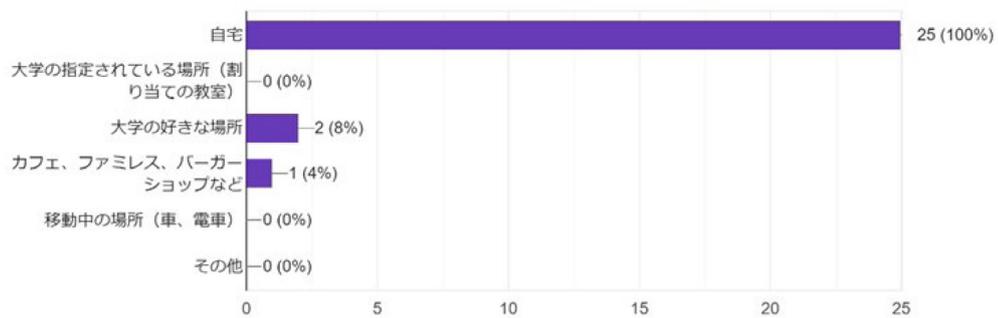
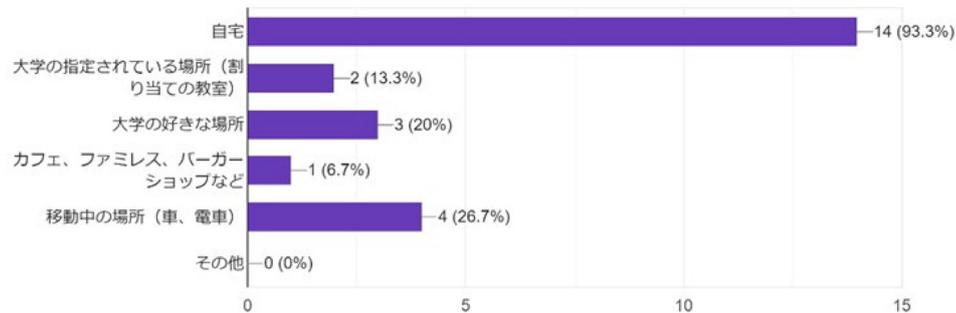


図6 2年B



1.2年のどのクラスとも自宅で授業を受けている学生が多いが、中には移動中の場所で受けている学生もいる。これは、スマートフォンを使っている可能性がある。大事な授業を乗り物の中でという考え方もあるが、寸暇を惜しんで学習しているということも考えられる。(図 4,5,6)

(3) オンライン学習は効果があると思う。

図7 1年

オンライン学習は効果があると思う。
21件の回答

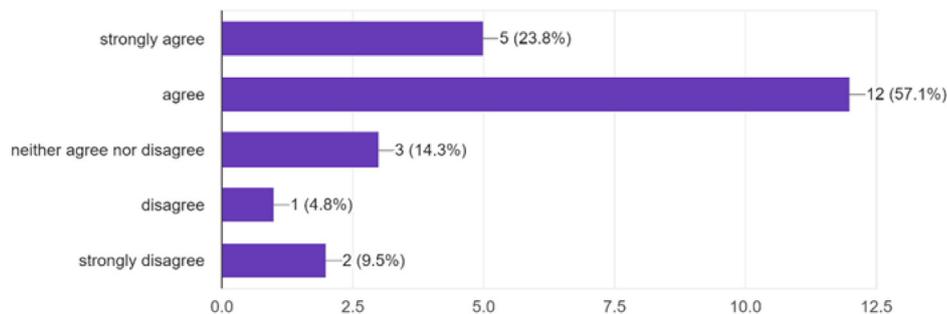


図8 2年A

オンライン学習は効果があると思う。
25件の回答

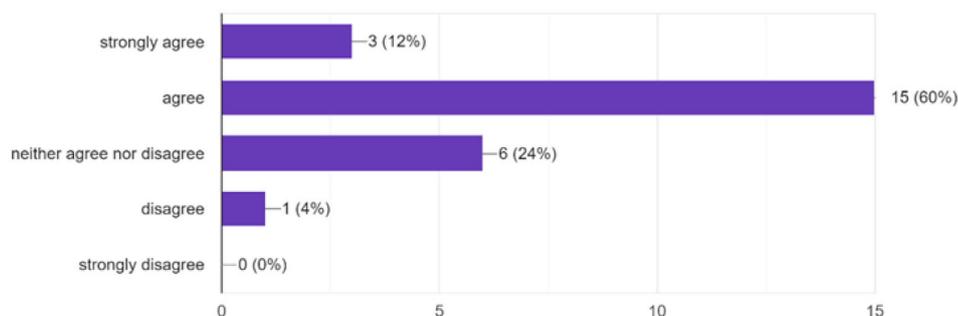
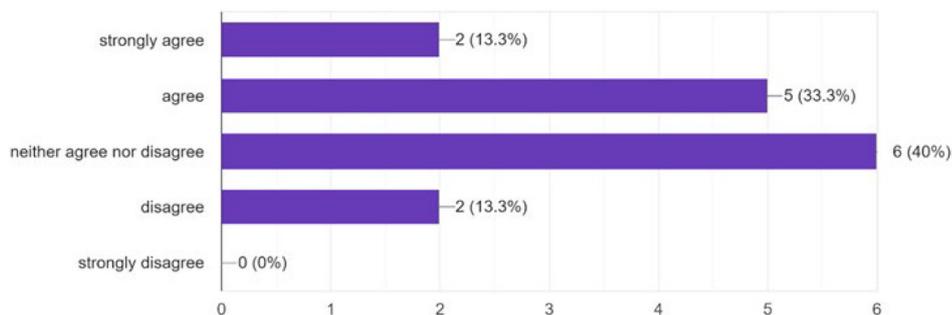


図9 2年B

オンライン学習は効果があると思う。
15件の回答



1年応用と2年Aの情報によく似ている。それぞれ「strongly agree」「agree」がそれぞれ80.9%、72.6%と高い数値を示している。しかし、注目すべきは1年にstrongly disagreeがいることである。やはり、1年は対面を渴望している学生がいるのである。しかし、肯定的な割合は非常に高く、学生はオンライン授業を評価していることがわかる。早稲田大学（2020）のオンラインに関する調査結果でも良い点として、自分のペースで学習できる点や、復習に取組みやすい点があげられた。そして、有益とされた授業には課題に対す

るフィードバックがあるなど示唆されているが、本授業でも課題に対して何らかのフィードバックを与えているので、学生は「効果がある」という設問に対して肯定的に反応しているのではないかと推察される。(図7、8、9)

(4) オンライン授業でも教員とコミュニケーションが取れる。

図10 1年

オンライン学習でも教員とコミュニケーションは取れる。
21件の回答

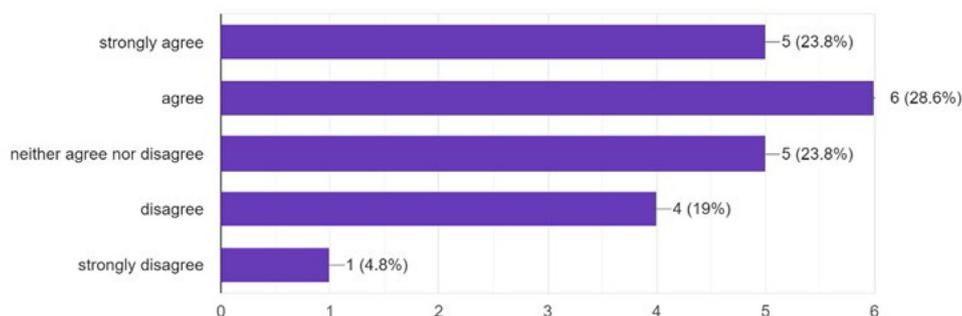


図11 2年A

オンライン学習でも教員とコミュニケーションは取れる。
25件の回答

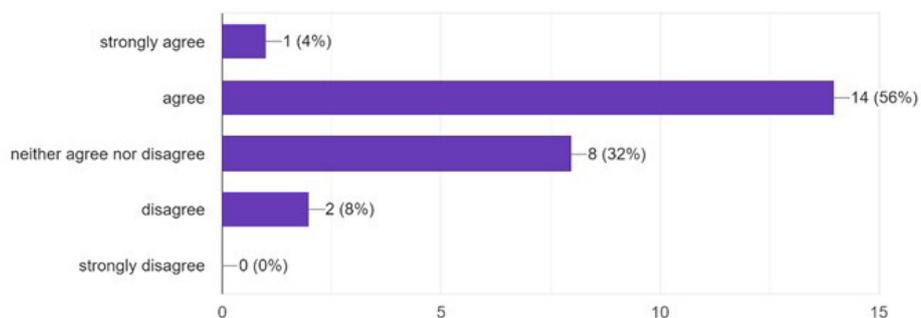
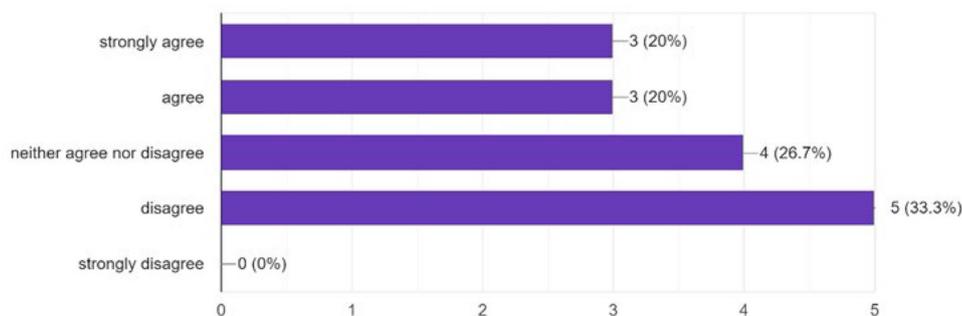


図12 2年B

オンライン学習でも教員とコミュニケーションは取れる。
15件の回答



この教員とのコミュニケーションという設問はオンラインでも対面でも難しい問題である。しかし、1年応用のクラスと2年情報のクラスでは、「とてもそう思う」「そう思う」が合計でそれぞれ52.4%、57%で半分以上である。否定的な答えはあまりない。これは、対面より、教員へのメールの問い合わせや質問が数多くあることから来ているのだろう。対面では授業が終わったら、次の週までは話すことはあまりない。しかし、オンライン授業では、メールの問い合わせ、質問が授業後も夜遅く12時を回ってまである。対面では教員と話をしないとされる学生もメールでは、あまり障害がないようである。そのような学生にとってはコミュニケーションが取れると感じているのではないかと思う。しかし、2年B音楽では、33.3%がそう思っていないようである。楽器の演奏など、対面でないとコミュニケーションが取れない学科は、直接の双方向の授業ができて初めてコミュニケーションが取れるということなのではないかと考える。学科によって学生の感じ方は違ってくる。これからの課題になると考える。(図10、11、12)

(5) オンライン学習は集中できる。

図13 1年

オンライン学習は集中できる。
21件の回答

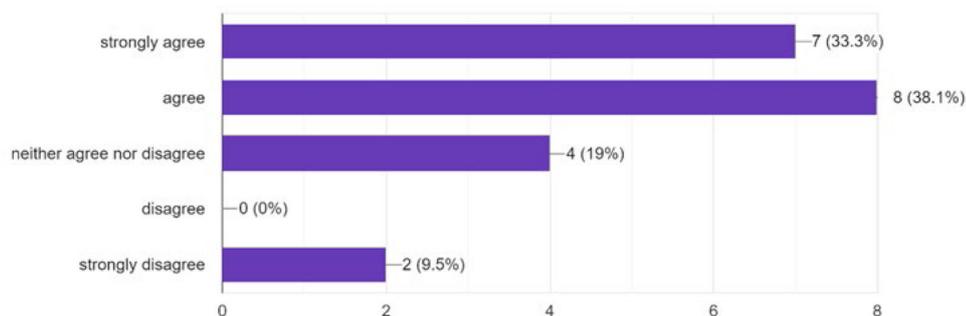


図14 2年A

オンライン学習は集中できる。
25件の回答

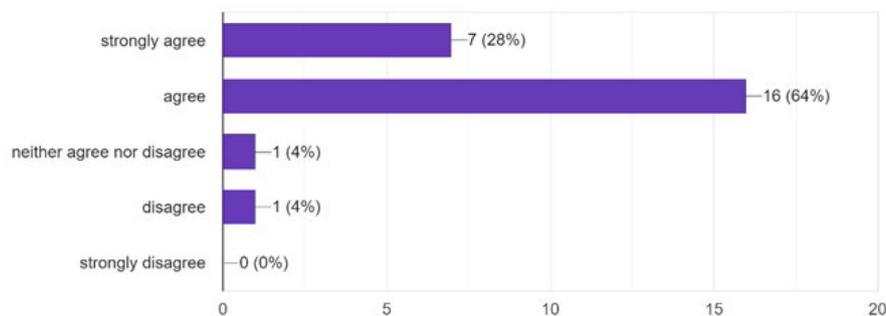
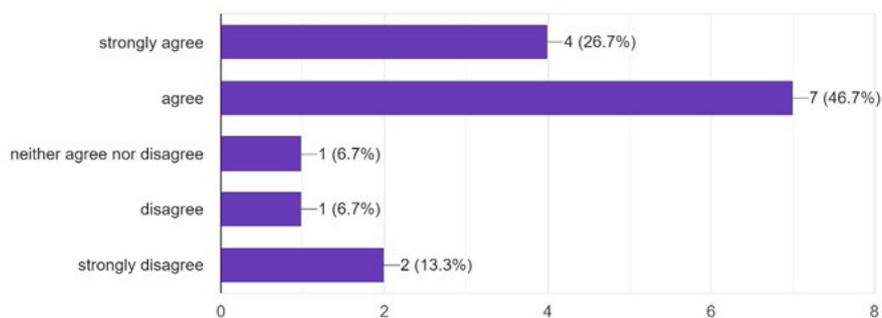


図15 2年B

オンライン学習は集中できる。
15件の回答



多くの学生が肯定的な回答をしているが、中には1年に2人、2年Bに2人の学生が「strong disagree」と回答している。その理由としては、家でパソコンで学習していると周りの誘惑に負けてしまうことがあるからだろう（図13,14,15）。

(6) オンライン授業は課題提出、語彙テスト、小テスト、レポートなどの中間課題がある。

図16 1年

オンライン学習は課題提出、語彙テスト、小テスト、レポートなどの中間課題がある。
21件の回答

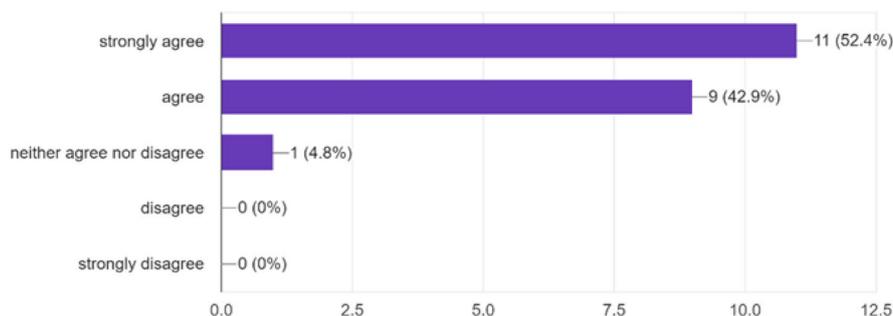


図17 2年A

オンライン学習は課題提出、語彙テスト、小テスト、レポートなどの中間課題がある。
25件の回答

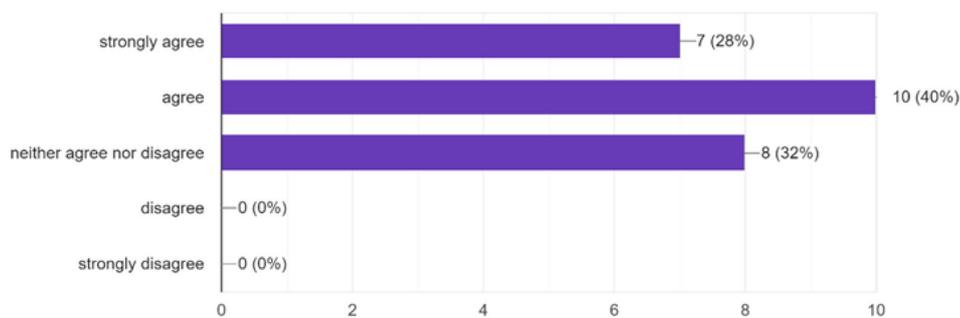
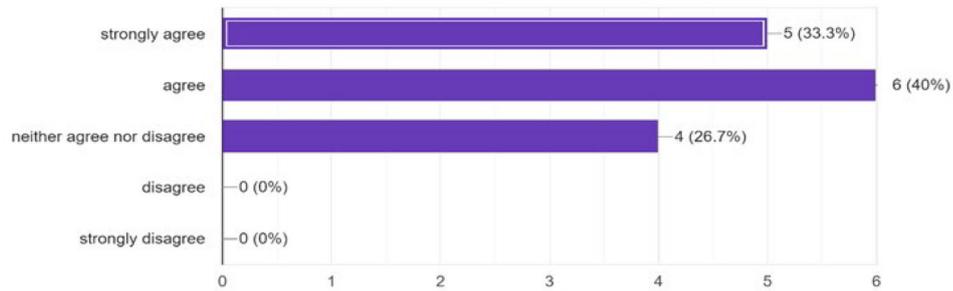


図18 2年B

オンライン学習は課題提出、語彙テスト、小テスト、レポートなどの中間課題がある。
15件の回答



この質問にはどのクラスも肯定的である（図16,17,18）。対面では、課題はあまり出せず、定期テストが主であったが、学習に参加しているかどうか判断するため、あるいは授業にメリハリをつけるため、教員は様々な課題を出す。これが多くの科目が重なると学生の学習負担になるので、教員も横の連絡が必要であると考えます。

(7) 対面授業はオンライン授業よりも motivation 維持に役立つ

図19 1年

対面授業はオンライン授業よりも motivation 維持に役立つ。
21件の回答

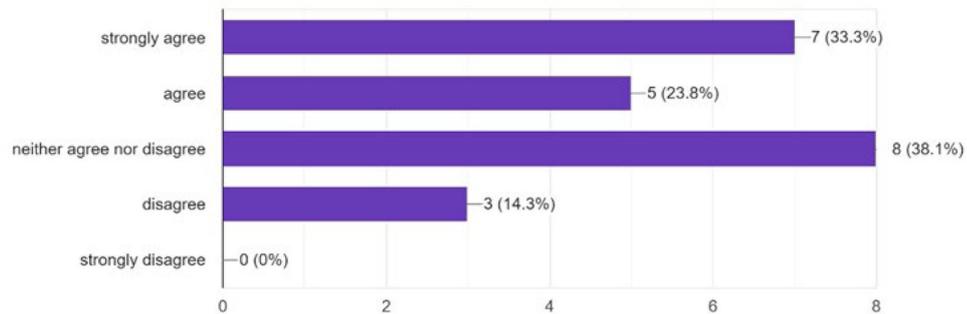


図20 2年A

対面授業はオンライン授業よりも motivation 維持に役立つ。
25件の回答

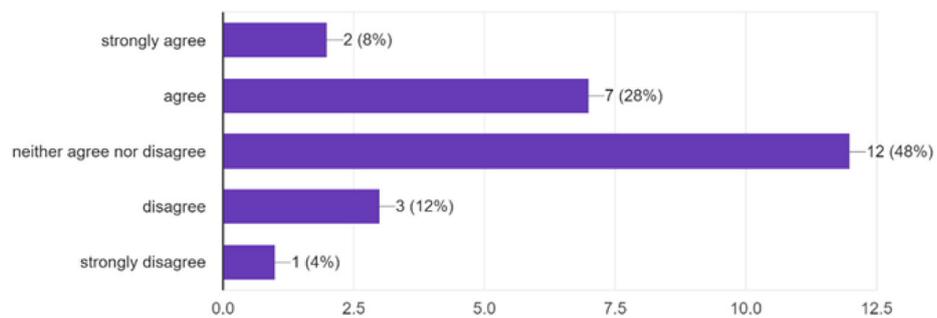
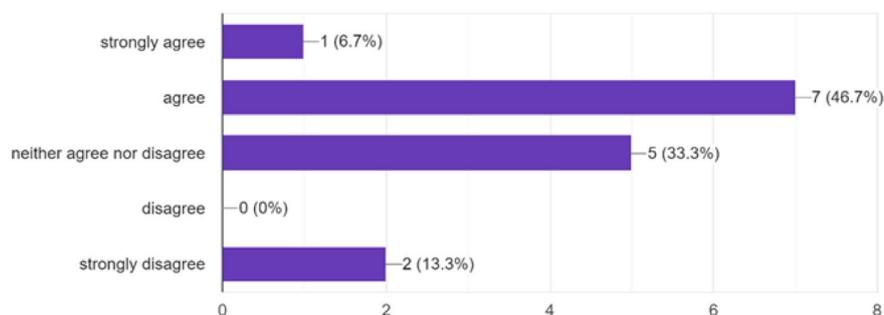


図 21 2年B

対面授業はオンライン授業よりもmotivation維持に役立つ。
15件の回答



1年は57.1%、2年Aは36%、2年Bは52.4%が肯定的な回答である。対面授業は刺激が外からもらえるから motivation 維持に役立つのだろうと思う。1年は当初から対面を希望しており、2年Bは実技の伴う音楽の学科なので、対面授業に賛成であろう。また、2年Aは情報関係なので、オンラインでも motivation は維持できると考えているのだと思われる。同じ学年でも学んでいることの専門性においても考え方の差が出てくるのだと言える。(図 19、20、21)

(8) 対面授業が再開しても課題提出など部分的にオンラインの活用を維持してほしい。

図 22 1年

対面授業が再開しても、課題提出など部分的にオンラインの活用を維持してほしい。
21件の回答

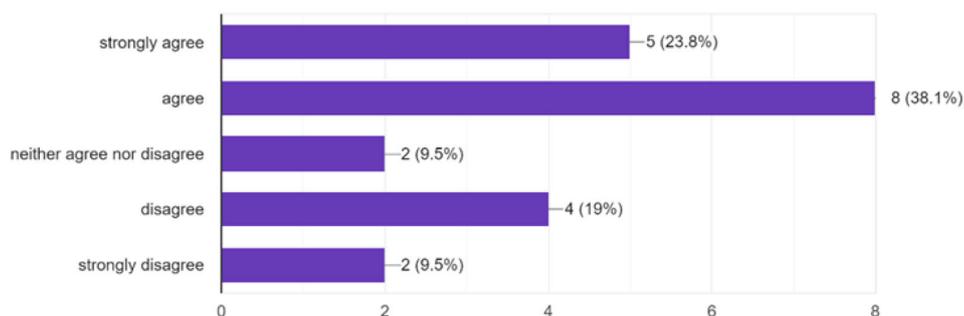


図 23 2年A

対面授業が再開しても、課題提出など部分的にオンラインの活用を維持してほしい。
26件の回答

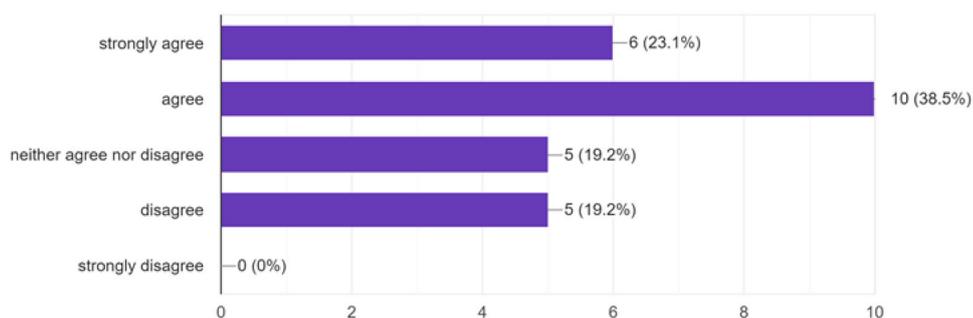
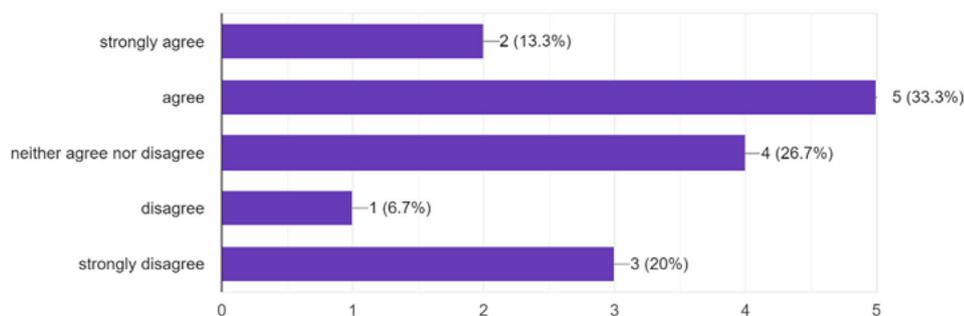


図24 2年B

対面授業が再開しても、課題提出など部分的にオンラインの活用を維持してほしい。
15件の回答



「strongly disagree」が、1年と2年Bに2名、3名という（図22,24）が、2年Aにはいない（図23）。しかし、どのクラスもオンラインの活用を評価しており、部分的には維持していくことを期待している。早稲田大学（2020）オンライン授業に関する調査結果でも、感染症のリスクがなくなってもオンライン授業3割 vs. 対面授業7割希望という結果が出ている。部分的な活用はどちらの学生も要望しているということになる。

(9) オンライン学習と対面との学習効果の比較

図25 1年

オンライン学習と対面との学習効果の比較
21件の回答



図26 2年A

オンライン学習と対面との学習効果の比較
25件の回答

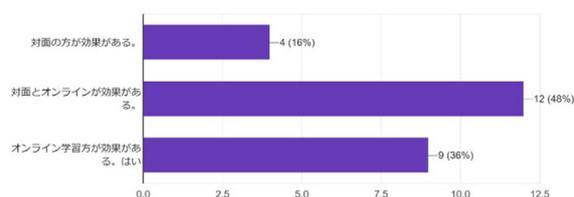
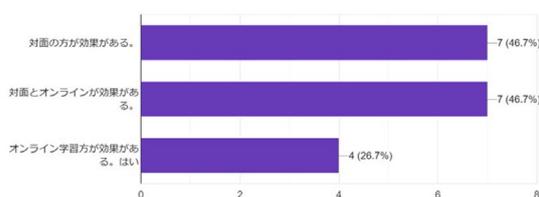


図27 2年B

オンライン学習と対面との学習効果の比較
15件の回答



やはり、1年は対面の方が学習効果があると考えている（図25）。2年B（図27）はオンラインの方が、学習効果があると考えている。2年A（図26）は、オンラインに軍配をあげている。平均するとどちらが良いとも言えず、やはり真ん中の「オンラインと対面のミックスが良い」とまとめるのが妥当であろう。

(10) オンライン授業の良い点 (複数回答可)

図 28 1年

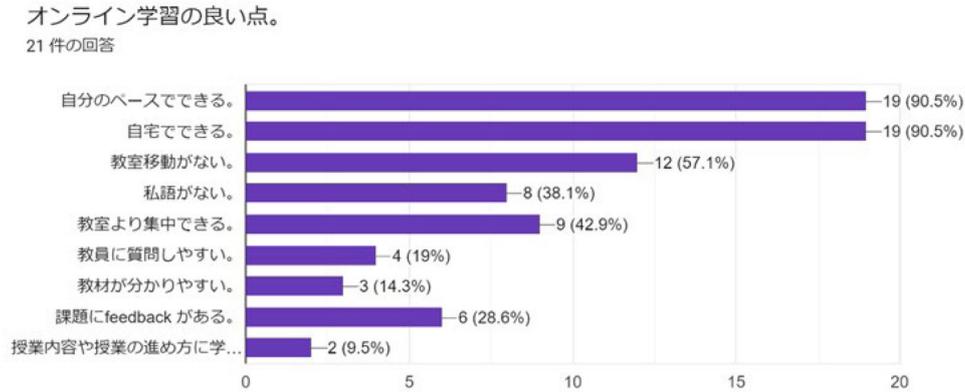


図 29 2年 A

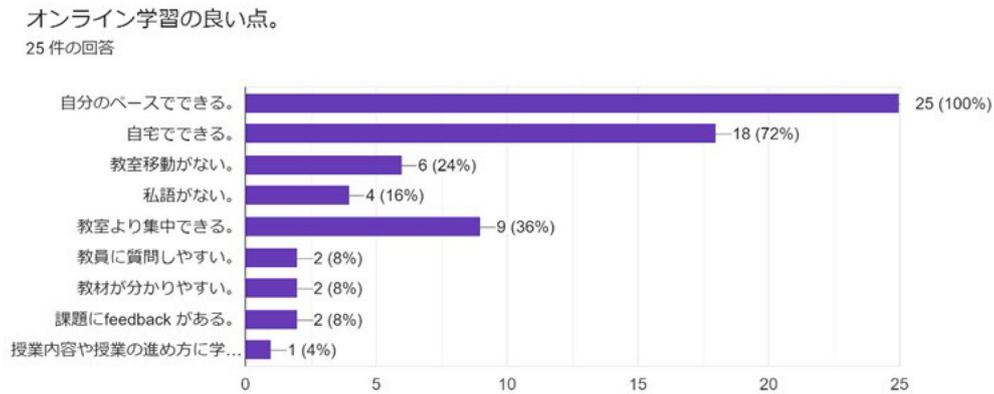
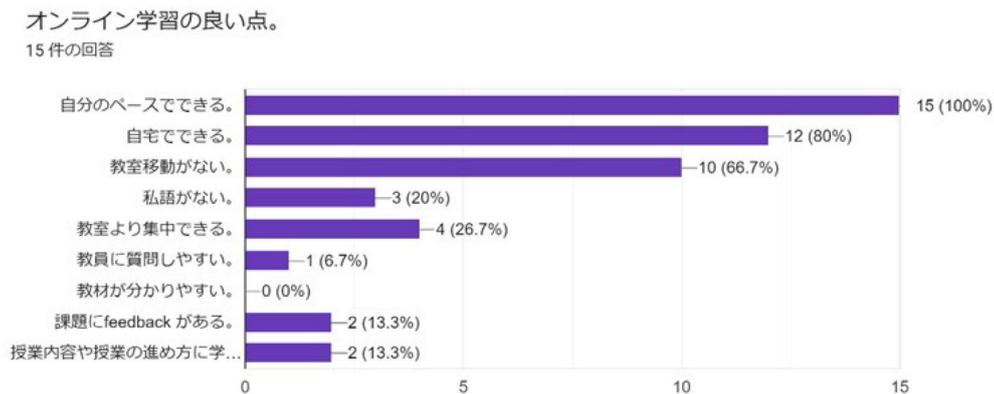


図 30 2年 B



1位は自分のペースでできるということであろう。次は自宅で、3位は移動がないということがあげられる。そして、集中できるということが上位に来る。文部科学省(2021a)の調査でも「自分の選んだ場所で授業を受けられた」79.3%、「自分のペースで学修できた」66.1%という回答でやや同様の結果である。選択肢にない答えとしては、「先生の話を聞き逃すことが殆どない。復習がしやすい。忘れてしまった箇所があったら、動画を巻き戻して視聴できたり、何回でも資料を確認できる」「自分で調べることが増える」「先生にすぐ質問できないので、聞く前に自分で

まず調べてみるのが身についた。だいたい自分で教科書を読み込んで調べれば理解出来ると気づけた。」「分からなかったところなど自分のペースで戻ってやり直して便利。対面の場合は授業の流れを止めてしまう場合があって出来ないこともあった。」以上の回答があった。

教員が側にいないことから、教わる授業ではなく、自分のペースで自分で学習していくというような Autonomy の力がついていくのではないかと考える。自立学習が、このコロナ禍で思いがけなくついているのではないかと考えると、このパンデミックも悪いことばかりではないのではないかと憶測する。(図 28、29、30)

(11) オンライン授業の悪い点 (複数回答可)

図 31 1年

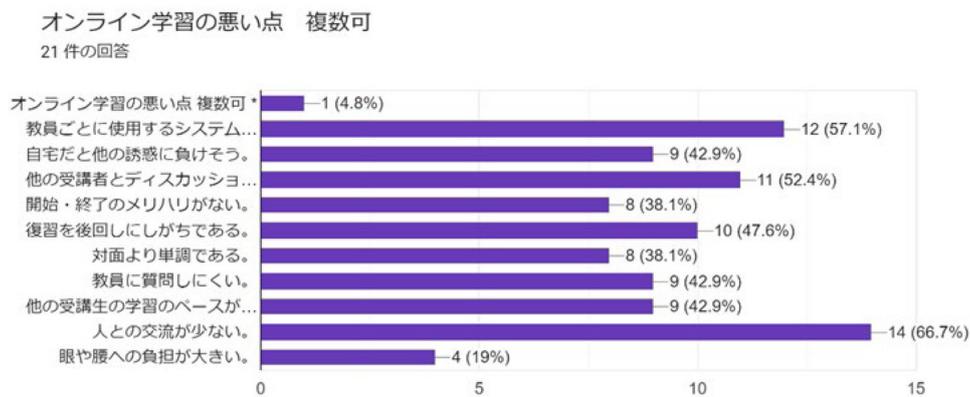


図 32 2年A

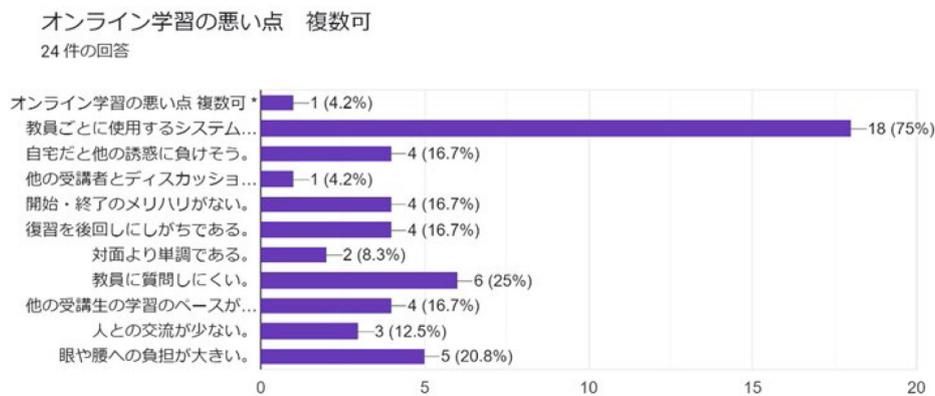
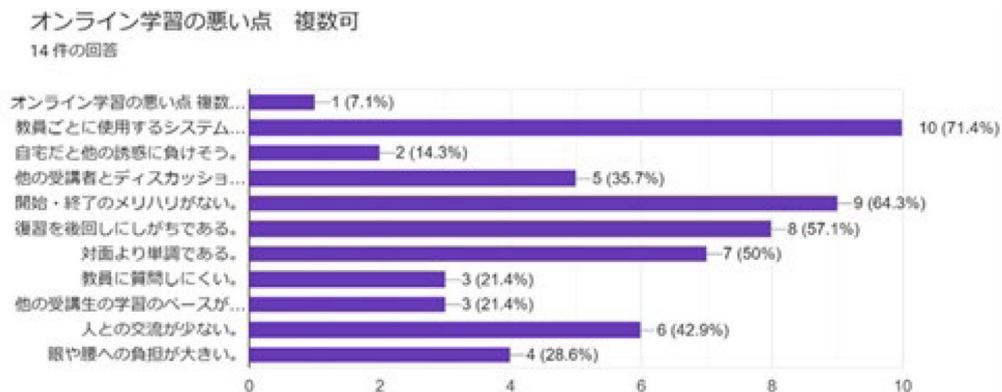


図 33 2年B



2年で一番多いのは2番目の「教員ごとに使用するシステムが違う」という選択肢であった(図31,32)。大学によってはその大学が選んでいるLMS(Learning Management System)で行うか、2,3あげてその中から選ぶのではないかと思うが、本学校では全て教員に最初から任せられており、学生も指導を受けていなかったもので、2020年度の春期にはとても戸惑ったのではないかと思う。それでも2020年度の半期はリアルタイムの双方向の授業も認められていたので、課題の見方、行い方、送り方などを対面と同じように説明ができ、学生からは質問もでき、個々の教員、学生が共通認識を持つことができ、対面と同じような授業ができていた。しかし、2020年度の秋期から、2021年の秋期、現在に至るまで、そのようなことができない。対面が始まったので、リアルタイムに出席することができない学生もいるからである。2021年度の春期では、大学に許可を得て、1回だけ、リアルタイムで授業の進め方や使い方の共通認識を測った。その際にはZoomで録画をして、YouTubeで配信した。また、教員である筆者も大学のポータルを使用しなければならないのだと思っており、ポータルとGoogle classroomの両方を使い、とても手間がかかった。実際確認すると必ずしもポータルは使わなくても良いとのことだった。教員もそうなので、学生もかなり戸惑っていたのだと思う。教員間の共通認識と学生にどんなものがあるかの説明や実際に体験する模擬授業などが必要だったのではないかと思う。(因みに複数の大学で勤務していると、Webex, Zoom, manaba, Moodle, Google classroomなど使用するものが多岐にわたる。)

1年生(図30)で特筆すべきは、「人との交流がない」ということである。1年生にとっては深刻なことだと思われる。大学に来て友人や部活の先輩とも会ったことがないなど、授業だけではなく、色々なところにあらわれている。竹内(2021)も学生の友人関係の希薄さや孤独について「これからも継続的に観察し、その影響を見定めていく必要がある」と述べているが、正にその通りである。

選択肢にない回答としては、「集中できない」「他の受講生とコミュニケーションが取れない」「パソコンが苦手な人には難しい」「ストレスが溜まる」などがあつた。「集中」については良い点でも「集中できる」と挙げられているが、悪い点でも「集中できない」というように2面性があり、正に人によって違うということがいえる。また、「大学での対面授業の経験がないので、どんな感じなのか分からない」「やる気が持たない。正直、教科書を読んで自分でやっているのと変わらない。高い学費を払ってやることじゃないと思う」というような意見もあることを教員としては念頭に置くべきだと思う。

(12) オンライン授業に満足している

図 34 1 年

オンライン授業について満足している。
21 件の回答

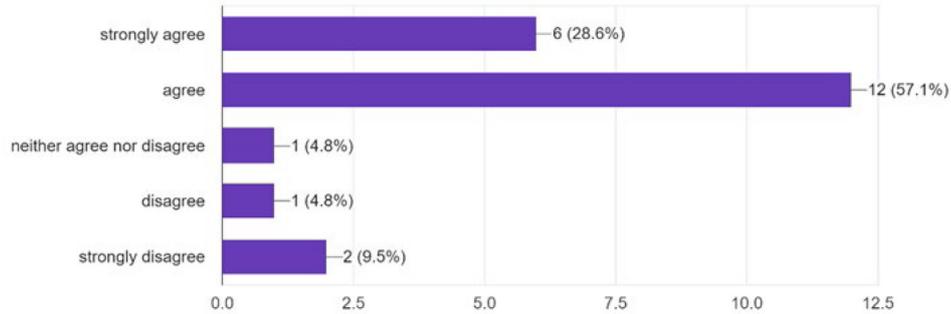


図 35 2 年 A

オンライン授業について満足している。
25 件の回答

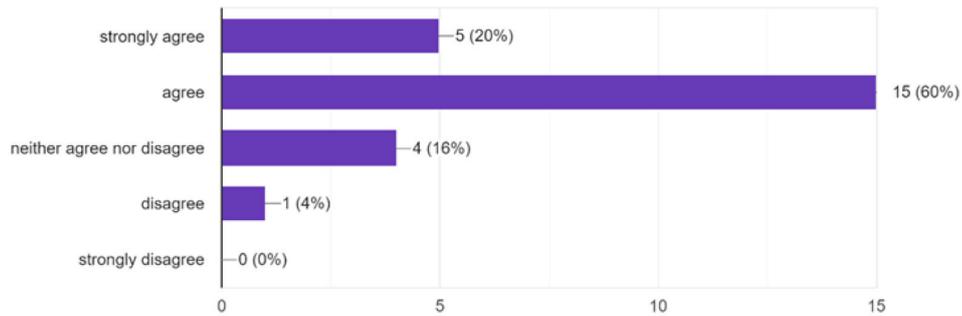
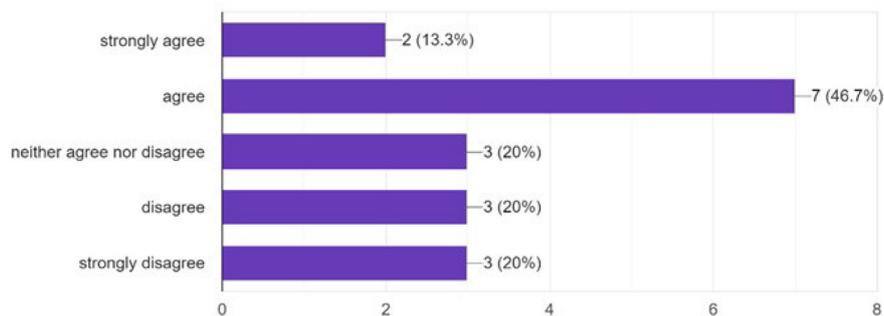


図 36 2 年 B

オンライン授業について満足している。
15 件の回答



オンライン授業については設問 11 のように問題点はあるものの、ほぼ満足しているようである。しかし、対面授業を求める 1 年や対面での指導が多い音楽などでは、満足していない学生もいる。学年に関わらず、学科によって求めるものが違うので、同学年であってもやはり、対面を望む学生もいる。内山（2021）の学生のオンライン授業の満足度に対する肯定的評価は、54.6%であった。吉田（2021）も回答した 70% 以上の学生と教員がオンライン授業に対して肯定的な評価をしたとしている。文部科学省（2021b）の調査でも「全体

的な満足度としては、不満を感じる割合より満足を感じる割合の方が多い。」とある。本学の学生は、肯定的な評価は1年85.7%、2年A80%、2年B60%で、平均75.2%であり、他と比較しても満足している学生が多いと言える。全般的に、大学生のオンライン授業に対する満足度は高いのではないかと考える。(図34、35、36)

(13) オンライン授業は楽しい。

図37 1年

オンライン授業は楽しい。
21件の回答

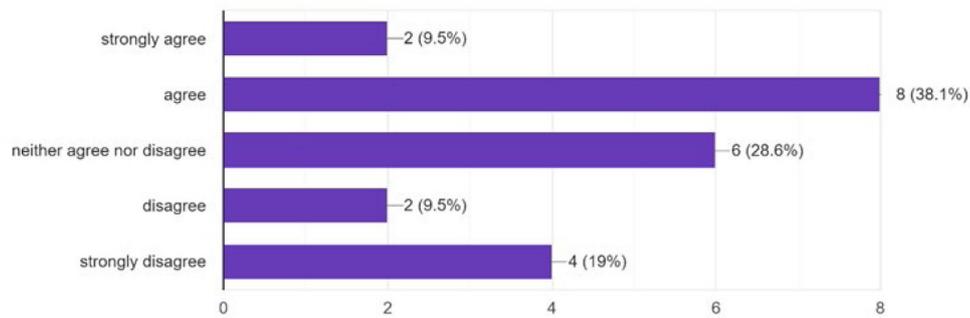


図38 2年A

オンライン授業は楽しい。
15件の回答

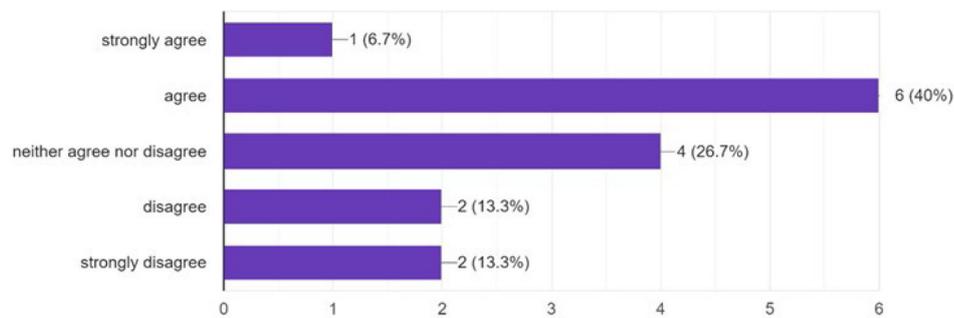
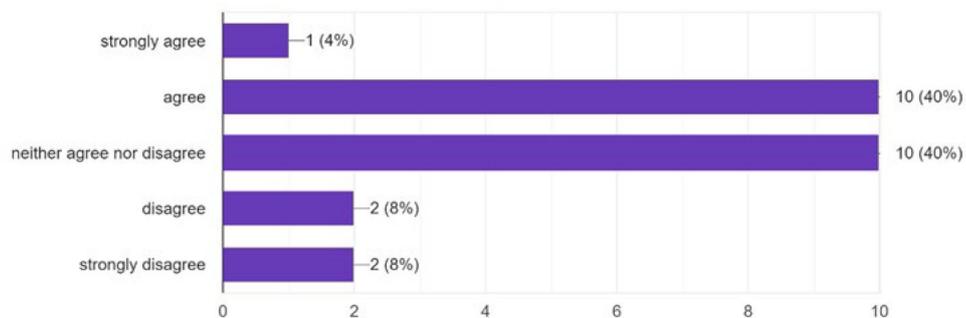


図39 2年B

オンライン授業は楽しい。
25件の回答



「楽しい」ということは感性であり、どの場面でどのようなのか明確でないが、自分で自分のペースを進めるということを楽しいと思うのかもしれない。オンライン授業においては、教員や他の学生とのかかわりがもちにくく、動機づけを維持するための社会的要因が機能しにくいと考えられる（岡田 2021）。学習を行っていく上で外部からの刺激が少ない中で、学生はどのように楽しさを見つけたのだろうか。楽しさの内容を聞かなかったが、記述式には、「つい、オンラインだと見逃してしまいがちでミスもありますが、それさえ気をつければ、まわりのペースを気にして焦ったり、調べる前に聞く癖がついたり、対面の嫌なところがなくて、英語の学習に関しては私には合ってる気がします。」「ちゃんと小テストや、音読練習などの課題提出があること。提出がないと、さぼってしまいがちなのと、対面に比べて顔が見られないため、課題の内容で学習が伝わるように丁寧に取り組むようになった。」「気持ち的にリラックスしながら授業を受けられるところがいいです。」等があった。自分のペースで自立して進められるということで、それが楽しさにつながっているのではないかと推察される。心理的に「楽しい」ということは学習意欲にも自立性にもつながり、学習の動機付けにもなる可能性がある。（図 37、38、39）

(14) オンライン授業と対面授業

図 40 1年

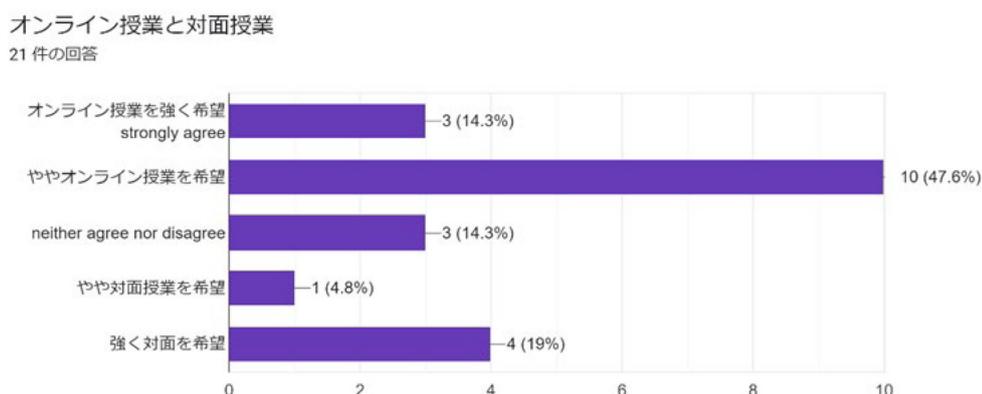


図 41 2年 A

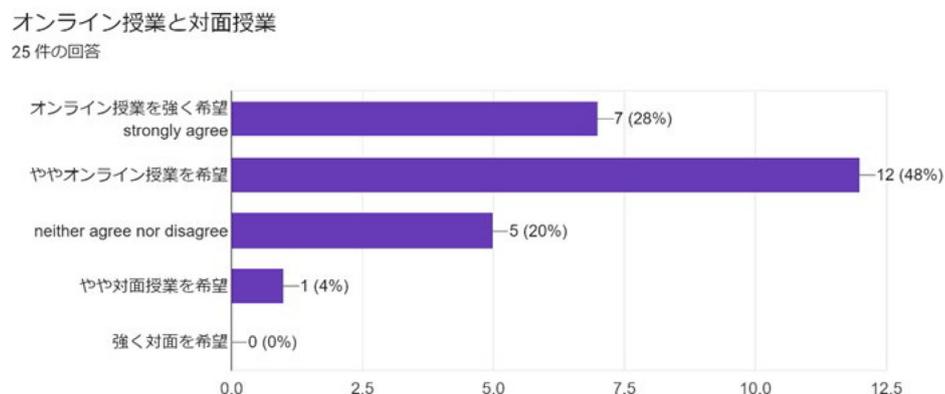
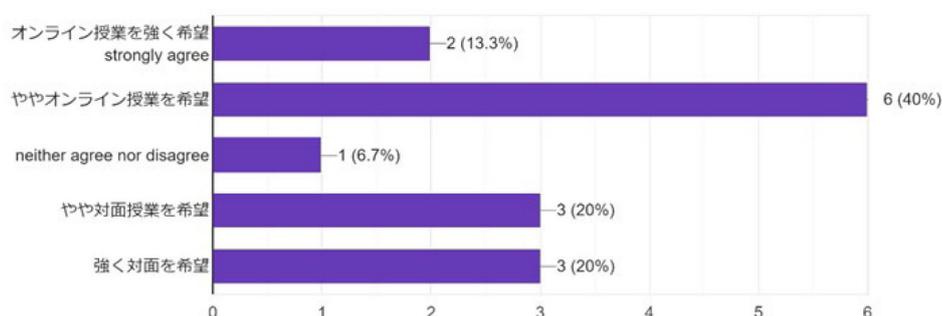


図 42 2年B

オンライン授業と対面授業
15件の回答



この設問では「ややオンライン授業」を希望という回答が一番多かった。全体的にもオンライン授業に傾いてはいるが、記述式には「オンラインだと授業に集中できないので対面になってほしいです。」「オンライン授業かなり精神的にキツイので、来年はぜひ対面でお願いいたします。」という2人の学生の意見もある。やはり、基本的対面で、部分的にオンラインがいいのではないかと考える。(図 34、35、36)

5. おわりに

本研究の目的はオンライン授業でどのように英語の授業を行ったか。それに対して学生はどのような反応をしたかを、アンケートを通して探るということであった。

オンライン授業に関しては学生も慣れてきたようで聞く、話す、読む、書くを全て網羅してきている。特に音読に関しては、ネット音源を活用しながら、学生も自分のペースで慣れてきたように思う。一人で行うということは他に左右されずに声を出せるということであり、それが学生にとって良かったようである。

オンライン学習に関するアンケートでは、学生はオンラインに好意的で、オンライン学習を認めており、かなりの学生がオンライン授業に対して肯定的な意見を持っている。また、学生ばかりでなく、教員もオンライン授業において多くの体験をして知識を得た。しかし、1年生は人と会っていないので、是非、対面の授業をしたいという声が聞かれる。これは今後真剣に対処しなくてはならない深刻な課題である。

今後、通常の状態に戻っても、このコロナの体験で得たオンラインの良さを生かしていきたい。対面学習になってもオンラインの良さを部分的に活用していきたい。コロナ禍は日本の遅れていたオンラインでの教育の後押しをしたということがいえるかもしれない。

6. 謝辞

授業やアンケートに協力してくれた学生の皆様、そしてご指導、ご協力くださった大学の皆様に心より感謝申し上げます。

【参考文献】

- 阿部真由美、香西佳美、遠藤健、蔣妍、森田裕介 (2021). 「大学教員のオンライン授業に関する知識の実態および授業の満足度と意欲に与える影響」 日本教育工学会論文誌論文一般社団法人 日本教育工学会 . doi <https://doi.org/10.15077/jjet.45057> (2021年10月17日閲覧).
- 内山仁志他 (2021). 「インターネット環境についての実態調査とオンライン授業に関するアンケート調査」 『人間と文化』 184-194. 島根県立大学 .
- 岡田涼 (2021). 「大学新入生のオンライン授業に対する状态的動機づけの変化—メタ認知的方略との関連—」 香川大学教育学部研究報告 (5), 1-7 香川大学教育学部 .
- Olexa, Robert. (2020). Introducing Web-Based English Learning Applications in the Japanese University Classroom 「日本人大学生を対象にした英語学習ウェブアプリケーションの導入」 環太平洋大学研究紀要 15. 1-12. 環太平洋大学 .
- 門山晴彦, Capper, Simon, 遠藤利昌 (2021) Let's Read Aloud & Learn English: Going Abroad !, 成美堂.
- 竹内慶至 (2021). 「オンライン授業に関するオートエスノグラフィ—授業実践の工夫と諸課題について」 名古屋外国語大学論集 9 号 71-86 名古屋外語大学 .
- 文部科学省 (2021a). 「新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査」, https://www.mext.go.jp/content/20210525-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf (2021年10月17日閲覧).
- 文部科学省 (2021b). 「令和3年度前期の大学等における授業の実施方針等に関する調査の結果について」, https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/mext_00007.html (2021年10月17日閲覧).
- 八城年伸 (2021). 「「ゆっくり解説」手法を用いたオンライン授業コンテンツ作成に係る考察」 「情報教育シンポジウム」 情報教育シンポジウム論文集 (2021), 53-60.
- 吉田壘 (2021). 「ぺた語義：オンライン授業導入の舞台裏 ～東京大学のオンライン授業を支えた一教員の視点から～情報処理」 情報処理 62 巻 11 号 614-618. 東京大学大学院工学系研究 .
- 早稲田大学 (2020). 「オンライン授業に関する調査結果 (2020年度春学期)」, 早稲田大学 2020年12月25日発表資料, <https://www.waseda.jp/top/news/70555> (2021年10月17日閲覧).